

1 自己評価結果に対する学校関係者評価

〔自己評価の評定は、A(十分に成果がみられた)、B(成果がみられた)、C(成果があまりみられなかった)、D(成果がみられなかった)の記号で表すこと〕

評価領域	本年度の重点目標	具体的取組(具体的な指標等)	自己評価		学校関係者評価委員会の意見	来年度に向けて(改善方策等)
			評定	成果・課題		
主体的な学び	知的好奇心を刺激する授業の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・校内研究を活用した知的好奇心を刺激するための導入の工夫 ・児童自身が活動を振り返る場の設定 ・「学んだことを生かす場」の設定を意識した授業づくり ・ICTの活用等により「わかる、楽しい授業」に向けた授業改善の推進 ・少人数指導や習熟度別指導などによる指導方法や学習形態の工夫 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・主体的な学びの実現に向けて、学んだことを活用できる内容、児童が「やってみたい」という思いが持てる内容を取り入れて授業を展開してきた。課題としては、学習内容が難しくなると「楽しい」と感じる児童が減少傾向にあるため、基礎基本をしっかり押さえたうえで、児童の知的好奇心を刺激する発展的内容の学習につなげる授業実践をさらに進めていく。 ・まとめの時間を確保し、自分の言葉で学んだことを振り返る活動に力を入れて取り組んだ。学校評価アンケートでは、学習の理解が92.4%、学習を生活に生かす85.7%という結果となり、知識の定着から知識の活用につながり、学びに深まりが出ていていると感じている。次年度も取り組みを継続していくことで、主体的な深い学びの実現を目指す。 ・ICTの積極的な活用については、全学年で実施した。ドリルパークやオクリンクプラス等のコンテンツを活用し、「わかる」、「楽しい」授業を目指して実践を行った。タブレット活用に関して「使いこなしている」と感じている児童の割合が増加している。ICTの活用によって、意欲・関心の向上や、内容の定着度合いの把握など、活用効果をさらに高める工夫、改善に努める。 ・算数では、学年教科支援教員の活用により少人数指導に取り組んだ。しかし、習熟度別指導については、教員数や教室の確保、時間割の工夫などの課題があり、学校全体で実践につなげるための方法を検討していく必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師が知的好奇心を刺激する掲示物を工夫して提示している。 ・学習の中で、問題を子どもたち自身が発見し、解決している。課題や問題を子どもたちが、主体的に解決する取り組みを、普段からしっかり実践している成果だと感じる。 ・主体的な学びの実現には、教師がしゃべりすぎない授業を目指すが良い。 ・算数については引続き習熟度の低い児童に対するサポートは継続していただくと共により密に保護者にもその情報を提供し、家庭での学習にもフィードバックするようなことを実施しても良い気がしている。伝え方には注意が必要だが、教育熱心なご家庭も多い中で学校だけで高い習熟度を維持することは難しいと思う。 ・次の項目にも関連するが、国語の語彙力、自分の思いを多様な表現を利用しながら表現する訓練がもっと必要な気がしている。 ・園児の知的好奇心が豊かな地域であると感じている。それをさらに小学校教育でさらに満たされていると感じる。 ・子どもがタブレットを自宅に持ち帰る機会が増えたため、保護者にもタブレット学習に活用されている状況が理解されるようになったと感じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の知的好奇心を引き出す導入の工夫や学んだことを振り返り、次につなげる場を意図的に設定していく。 ・学んだことを生かす場を大切に、学習の成果を実感できる授業づくり。 ・少人数指導や習熟度別指導など、指導方法や学習形態を工夫し、個に応じた指導の充実。
自他を尊重する心	自己肯定感を高める生徒指導の機能を生かしたわかる授業の実践 学年・学級の枠にとらわれない、全教職員による温かみのある指導	<ul style="list-style-type: none"> ・教育活動全体をととした道徳的実践力の育成 ・生活アンケート、職員打ち合わせにおける情報共有の活用 ・ヒドゥンカリキュラム(潜在的教育効果)を理解した教職員自身の言動、姿勢の徹底 ・挨拶の推進 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・学校評価アンケートでは、「良いところを見つけること」「相手の気持ちを考えて関わること」「感謝の気持ちを持つこと」の項目で評価が高く、他者への温かい関わりを意識できている児童が多にいる。しかし、他者の良いところを見つけても、それを伝えるところまでは十分にできていない。自己肯定感を高めるためにも、思いを伝えよう環境や雰囲気づくりを引き続き教育活動の中で行っていく。 ・朝の挨拶運動では、生活安全委員会を中心に毎週月曜日に行っているが、児童の意識はまだ十分に高まってはいないと感じる。今後も挨拶の目的や重要性を児童に伝えながら、推進していく。 ・教職員が児童に寄り添った言動や姿勢を徹底できるよう努めていく。 ・登校渋りの児童が複数名いる。渋りの原因や状況が個々の児童で違うため、担任だけでなく、学年主任や学年教科支援教員、学習支援室活用推進教員、スクールカウンセラー等、全職員で対応している。しかし、人的体制には限りがあり対応に苦慮している。きめ細やかな支援を行うための方法や組織体制の構築を今後も行っていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他者の良さを発見して伝えることが弱い。他者の良さを見つめたり、感じることはできている。伝える力は、日の出小の子どもたちにはある。教師が日々の生活の中で、良さを伝える姿を手本として見せていくことが必要だと感じる。 ・登校渋りの原因を一人ひとり考察し、具体的な支援につなげることが必要。登校渋りの原因は学校、家庭の場合が多い。渋りの原因が学校にある場合も多いにある。教師がしっかりと対応し、児童理解をさらに深めていってほしい。 ・子どもたちの中には、先生に相談したくてもできない子がいることを教員は理解した上で、働きかけをしていくことが大切ではないか。 ・周りの友達の良いところを見つけて、それを表現することをどうしても恥ずかしかがってしまつて口にはできないことはある程度仕方ないことだと感じている。一方でそれを言葉にするだけでなく、手紙にして渡してあげるなど、表現の仕方をいくつか学んでもらえると、思いは伝わるのではないかと感じている。 ・「相手の気持ちを考えて関わること」等は、園でも大切にしている。園小でこうした育ちを連携、共有していきたい。 ・社会性の育成の観点から、指導が必要な場面では適切に注意を促すなど、メリハリのある指導の充実をお願いしたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育活動の中で自己肯定感を高めるための、「思いを伝えよう」場面設定を意図的につくり、環境や雰囲気づくりを引き続き教育活動の中で行っていく。 ・2か月毎に一度の生活アンケートの実施継続、活用の推進。 ・全学年ローテーション授業による道徳指導の充実 ・委員会活動等の自主的活動を基盤にした、挨拶運動の継続推進 ・教育相談の充実
健やかな体	児童自身が健康や安全に気を付けることができるための指導 外遊びの奨励	<ul style="list-style-type: none"> ・感染症の状況把握と速やかな対応をととした拡大防止 ・生徒指導委員会との連携による学校生活における安全指導の徹底 ・体育の日常化に向けた強化月間の取組の充実 ・体力向上推進委員会を活用した、外遊びの推進 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・校内では、感染者数の状況により、給食の食べ方や行事の実施方法を工夫し、感染拡大防止に努めた。 ・体力向上推進委員会主催の長縄や短縄活動では、記録を表彰したり、技能を全校朝会で披露したりするなど、活動を通して外遊びの活性化を図ることができた。 ・児童、教職員ともに日常生活における安全意識の向上を図るため、安全指導部や生徒指導委員会を中心に働きかける取り組みが必要である。また、安全点検は教職員のみで実施しているが、PTAや学校地域連携運営協議会委員等、第三者の目録での点検の必要性も感じている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・安全点検は教職員だけでなく、第三者の目で点検することは必要。大人だけでなく、子どもたちの目で危険なことを見つける活動を実践して、子どもたち自身の力で危険を察知する力がつくとうい。 ・PTA活動の中で登下校の見守りなど企画しているが、1年間にわたる長期の活動で、どうしても参加者が徐々に減ってくる傾向にある。一方で交通安全月間や1学期の始まりなど、意図的にピークを作って、その間に集中して見守りするなどの軽重はあっても良い気がしている。 ・縄跳びの活動は目的や目標、目当てが持ちやすく、成果が出やすい。外遊びのきっかけとなると思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・外遊びの奨励 ・運動の日常化に向けて、委員会等が中心となり、休み時間を活用した強化月間の取り組みの継続 ・避難訓練や外部講師による授業を活用した、発達段階に応じた、体や命について学ぶ機会の充実 ・児童や第三者(PTA、CS)による、校内安全点検の実施
豊かなかかわり	異学年交流など、他者とかかわる教育活動の推進 教育活動の見える化の推進	<ul style="list-style-type: none"> ・総合的な学習の時間や特別活動の充実 ・地域学習や社会人講師による授業の充実 ・学校だよりやホームページなどによる教育活動の情報発信の強化 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者アンケートでは、情報発信に関する項目は肯定的評価が94%と高い評価で推移している。ホームページや学校だより、廊下掲示を通じて児童の様子をタイムリーに発信するとともに、今年度からICT通信を発行した。授業でのICTの活用状況や効果も保護者に見えやすくなったと考えられる。今後も、学校教育活動への保護者の理解と協力が得られるよう、内容を精査し情報発信を工夫していく。 ・「児童と地域とのかかわり」に関する項目は、依然として評価が低い傾向となっている。しかし、数値は確実に伸びている。地域人材の協力を児童により意識させるとともに、地域人材を積極的に活用していく。また、学校の教育活動だけでなく、各家庭の地域活動への参加も、児童の地域への所属感の向上につながるのではないかと考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者からとても高い評価を得ている。教職員の高い信頼性の現れだと感じる。日々の子どもへの対応が良いからその結果だと感じる。今後も丁寧な対応をお願いしたい。 ・地域の活動はシニア、幼児向けのものが多い。小学生対象のものが増えると、数値が高くなるのではないか。 ・学校評価アンケートの項目で、「地域の行事」という聞き方が来年度の課題ではないか。 ・大きな祭り等で感じるだけでなく、日々の生活の中で、色々な大人に支えられていることが認識できればいい。 ・保護者への情報発信については、内容の工夫や保護者が配信に慣れてきた成果だと感じる。 ・児童と地域との関わりを深めるためには、各家庭が地域活動へ積極的に参加することが重要であるが、地域の行事やイベントに関する情報は、各家庭で主体的に情報収集しなければ把握しにくいという課題がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・きょうだい学年の交流や幼保小中連携をととした、異年齢交流の継続と振り返りの充実 ・教育活動の「見える化」を意識した情報発信の継続 ・地域の社会人講師や外部指導者を活用した多様な体験学習の充実
特別支援教育の充実	一人一人の児童理解に基づく個に応じた指導、子どもの心に寄り添った指導 通常学級と特別支援学級との交流及び共同学習の推進	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒指導委員会、特別支援教育推進委員会による校内の情報共有及び指導体制の確立 ・一人一人の持てる力を最大限に伸ばす環境づくり ・個別的教育計画、個別の指導計画の作成とおとした保護者との共通理解と関係機関との連携によるきめ細かな支援 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒指導委員会、特別支援教育推進委員会で情報共有及び指導体制を整え、チームで取り組むことができた。現在、2つの委員会が別々で話し合いをもっているが、協議内容によっては2つの委員会にまたがる内容もあるため、学期に1回程度は合同会議にすることで、より指導、支援体制の強化が図れるのではないかと考える。 ・学校評価アンケートでは、「楽しく学校生活を送っている」と感じている児童、保護者ともに90%と高い評価で推移している。今後も児童理解を深め、信頼関係の構築の方法や児童との関わり方を振り返りながら、全職員で取り組んでいく。さらに、一人ひとりの変化を見逃さないよう、引き続き組織的に対応していく。 ・引き続き個別的教育計画、個別の指導計画の作成を通した保護者との共通理解を、定期的かつ確実に進めるように、特別支援教育推進委員会で確認をしながら進めていく。ケース会議を適宜行い、関係機関や学校、家庭と連携し、児童へのきめ細かな支援を行っていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・特別支援学級の雰囲気がとてもいい。子どもたちがいきいきとしている。 ・一人ひとりの理解は高い。きめ細かい指導は引き続き必要。 	<ul style="list-style-type: none"> ・特別支援学級と通常学級の交流及び共同学習の充実 ・生徒指導委員会と特別支援教育推進委員会の組織的な運営及び連携の強化 ・個別的教育支援計画、個別の指導計画作成を通した保護者や関係機関との共通理解及び連携 ・インクルーシブ教育の推進
小中連携	幼児期から中学生まで12年～15年を見通して、地域を巻き込んだ「チーム日の出」で子どもを育てる。	<ul style="list-style-type: none"> ・幼・保・小・中相互の交流活動の充実 ・系統的な学習指導、生徒指導を充実させるための園小中連携会議の充実 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・幼保小中の交流活動では、積極的な交流を行うことができた。今後は、交流のものにとどまらず、園小中連携会議においても、振り返りの実践を意識するよう働きかけを行っていく。さらに、次年度は、ふれあいの場面だけでなく、学習に関する内容に重点を置いた取り組みを進めたい。活動の目的、振り返り活動、活動の効果、持続可能等について中学校区で検討し、実践につなげていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・園小中連携は積極的にできていると感じる。 ・上にも記載しているが、学年を跨いだ活動や学校(園、中学校、地域の大学など)を跨いだ活動が、もっと増えれば地域全体が盛り上がりつつあると感じている。安全上の懸念があったりすることも理解できるが、もっと校外に出て地域を知る、日の出小学校以外の人たちと接する経験をすることで成長する場面も多くなると感じている。 ・現在のつながりをより深めることで、内容の理解も深まると考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・グラウンドデザインを基盤とした中学校区としての目指す子ども像の共有 ・相互授業(保育)参観、情報交換の推進 ・園児、児童、生徒の既存の交流活動内容の充実及び振り返り方法の工夫

2 授業、行事、施設等に関する学校関係者評価委員の意見・感想

施設関係:電話での会話を録音をできる機能を設置したほうが良い。トラブルの対応時や保護者対応の際に、事実をはっきりさせるためにも設置は早急に必要だと感じる。日の出小学校だけの問題ではなく、浦安市の学校全体も必要性を感じているのではないかと。